


 書評

齋藤利和 著，樋口輝彦 監修

新現代精神医学文庫 アルコール性障害

和田 清

人は一日の区切りとして、一日の疲れを癒すために、晩酌をしてきた。同時に、「アルコールは社会の潤滑油である」という言い方があるように、古来、人は飲酒を人間関係形成のための重要な一手段として利用してきた。わが国では「宴会」にはアルコールは付き物であり、時には「無礼講」といった形で職場を中心とした社会習慣として定着している。しかし、その一方で、「酒乱」という言葉をはじめとして、飲酒による他者への絡み、暴力などを極度に忌み嫌う社会的ラベリングも存在する。このような一見相反する状況を社会学者、清水新二は「ともに飲み、社会規範を踏み外すことなく酔いを共有することが、わが国における適正飲酒の重要な一側面である」と評した。

そもそも、アルコールはどのような機序で「酔い」をもたらし、耐性を生みだし、依存を形成するのであろうか？ 離脱時の振戦せん妄、けいれんはどうして起きるのであろうか？ そして、認知障害は？

アルコールは他の多くの中枢神経作動薬とは異なり、特異結合部位(受容体)を持たない。作用点が特定できないのだ。神経細胞膜の脂質二重層の流動性の変化が大きな役割を担っている(膜仮説)ことは確かであるが、それですべての事象が説明されるわけでもない。予想以上に機序解明が困難な物質がアルコールであろう。

ここに本書の意味がある。本書は全14章で構成されている。飲酒実態から始まり、アルコールの代謝、依存の概念変遷、依存症・関連障害の診断・治療、若年・女性・老人の依存症、刑事責任能力などと本書の表題通り、中枢神経

系に関するアルコール性障害を網羅している。特に、最終章である「アルコールとアルコール依存の生物学」では、著者の得意とするアルコール依存に関する脳内の生物学的知見が多面的に紹介されており、神経幹細胞による新たな研究・治療への応用の可能性も紹介されている。本書はアルコール性障害について調べようとする医師、研究者にとって、恰好のレビューを提供している。

同時に、各章の末尾に載せられている著者のエッセイは本書への「味付け」として興味深い。そこに登場するイッキ飲み、泥酔、治療者への脅し、家族の崩壊、何度も聞く「もう一度だけ」という言葉は、アルコールを含めて薬物依存症治療に少しでもかかわったことのある医療従事者であれば、誰でもがうなずける「現場の話」である。これらの体験の中で、治療者としての意欲を削がれ、アルコールを含めた薬物依存症治療を回避・忌避しようとする医療従事者がどんなにいたことか。しかし、医療従事者自らが自助グループ活動に参加体験することによって、「耳が聞こえるようになる」という著者の呼びかけは重要である。「集会の中で聴いている者は他のメンバーの語りの中に実は自分の姿をみている」のはアルコール依存症者ばかりではない。

本書は中枢神経系におけるアルコール性障害に関して、いつでも参照可能なハンドブック的レビューとして、価値ある一冊と言えよう。

(国立精神・神経センター精神保健研究所)

●A5 125頁 2006 定価2,730円(本体2,600円+税) 新興医学出版